

満洲研究最前線の良質な見取り図

大沢 武彦



A5判 264頁
 東方書店
 [本体 2400円 + 税]

加藤聖文・田畑光永・松重充浩編
挑戦する満洲研究
 ―地域・民族・時間―

本書は一般社団法人・国際善隣協会の定例講演会において二〇一二年から二〇一五年にかけて行われた一三人の若手研究者による新しい満洲研究の現状報告をまとめたものである。

一般社団法人・国際善隣協会とは、第二次世界大戦中の一九四二年、当時の満洲国関係者の東京における親睦の場として設立された「満洲交友会」が前身である。しかし、敗戦によってその性格を大きく変え、一九四六年には満洲地域からの邦人の引揚げ促進と引揚者の援護、歴史資料の保存などを目的とする姉妹団体として「満蒙同胞援護会」を設立し、さらに一九四七年からは外務省所轄の「社団法人・国際善隣倶楽部」、一九七二年には「社団法人・国際善隣協会」と改称して、満洲国関係者以外にも門戸を広げて、中国およびア

ジア諸国との善隣友好を目的とする活動を行ってきたという（「あとがきにかえて」）。まさに本協会は、満洲の実態とその記憶、語られ方にとっても重要な団体であることが分かる。まず、本書の章立てを以下に示そう。

加藤聖文・田畑光永・松重充浩「まえがき」

第一部 研究の視点

松重充浩「『世界史』から満洲史を考える——『二〇世紀満洲』の射程に関する覚書」

加藤聖文「歴史としての満洲体験——記憶から記録へ」

塚瀬進「満洲の歴史継承性から見た二〇世紀満洲」

菅野智博「満洲研究の視座——記録と記憶をめぐって」

第二部 満洲国時代の検証

遠藤正敬「満洲国の『国民』とは誰だったのか——国籍と戸籍から考える満洲国と日本人」

白戸健一郎「満洲電信電話株式会社とは何だったのか」

細谷亨「地域から送り出された満洲移民」

湯川真樹江「二〇世紀前半の満洲における水稻作試験と品種の普及について」

大澤武司「新中国から祖国へ——日本人留用者と日本人戦犯の帰還」

佐藤量「日中関係史のなかの大連——対立と友好のジレンマ」

第三部 周辺と満洲

鈴木仁麗「日本人が出会った内モンゴル」

青木雅浩「外モンゴルから見た満洲——一九二〇年代」

麻田雅文「ロシアと満洲をつないだ中東鉄道の歴史——一八九六—一九三五年」

満洲関係略年表（一九四五年まで）

第一部では、長年、満洲研究を牽引してきた松重氏から

本書中で最も若手とも言える菅野氏まで、現在、それぞれの立場から、どのようにして満洲という存在と向き合い研究をしていくべきかが語られる。松重論文では、満洲史の今日的意義の所在を考えた上で、今後の満洲研究にあたっては、その外国史の観点、言い換えるならば「世界史」の中に、どのようにして位置づけるのかということの意義、そして、絶えざる資料発掘・保存に向けての努力を主張する。加藤論文では、戦後、満洲がどのように記録されてきたのかについて、満洲国に関わった当事者達が自身の記憶を、どのように記録として書き綴ってきたのかを題材に明らかにしており、大変に興味深い。そして、塚瀬論文は、これまでの議論から一転して特に明代から清代、そして満洲国へと流れる非常に長いスパンでの満洲の歴史の流れを描き出している。また、菅野論文では、満洲国期における農村実態調査のあり方と、その対象となった農村がまさにこの現在どのような現状になっているのかを明らかにした上で、近年、活発に資料収集やオーラルヒストリーを行っている「満洲の記憶」研究会の活動を紹介している。

第二部は、満洲国期から戦後を中心として、その多様な実態を明らかにする六つの実証論文が収録されている。遠藤論文では、満洲国における国籍と戸籍の取り扱いを通じて、果

たして満洲「国民」とは、「日本人」とは、という重要かつ重い問いを投げかけている。白戸論文は、一九三三年九月に満洲国において営業を開始した満洲電信電話会社の電信・電話・ラジオ放送の実態を明らかにする。ここでは、当時の日本本土においてもおそらく存在していなかった大規模な多言語政策や他民族に直面してどのように自らの主張を効果的に伝え、宣伝していったのかを論じている。細谷論文は、これまで検討されることの少なかった、満洲移民を送り出す側の日本の農業政策や日本の農村のあり方を通じて、日本における満洲の重い「存在」となった満洲移民の実態について論じる。湯川論文は、二〇世紀前半の満洲を舞台として、主に水稻作試験とそこで創り出される品種がどのようにして普及していくのかについて検討する。そして、その考察は満洲国期に止まらず、その品種が中華人民共和国期までどのように引き継がれているかを明らかにしている点は非常に興味深い。大澤論文は、時期を中華人民共和国期にあわせ、日本人留用者並びに日本人戦犯の帰還、いわゆる後期集団引揚げの問題を日中間係史から分析する。互いの国家の論理の狭間でその存在を翻弄され続ける在留邦人の様子が評者の印象に残った。そして、第二部の最後の論文である佐藤論文では大連の都市形成を描きつつ、そこに住む人々の日中交流のあり方に

ついて、その射程を現代にまで伸ばしつつ、単にノスタルジアだけではない、その歴史の語られ方・記憶を論じている。第三部は、近年研究が大きく進んだ満洲の「周辺」の問題についての論文が収録されている。鈴木論文はこれまで満洲の問題において研究が極めて少なかったモンゴル人の問題を取り上げている。そして、日本人のモンゴル認識を主に一九世紀末からだどっていく。そして、二〇世紀に日本にとってのモンゴルは外交問題にもなり、満洲国成立にむけてどのようににモンゴルを日本に引きつけようとしたのかを論じ、その限界性をも明らかにする。青木論文は、モンゴルのアーカイブを使いながら、外モンゴルにとつての満洲、モンゴル人が住まう地域としての満洲認識を、主に政治面から論じている。ここでは二〇世紀前半の外モンゴルの政治に関与した人々は、(一)モンゴル人の統一と独立のための活動地域、(二)日本の影響が及ぶ地域、という二つの姿勢で満洲を捉えようとしていたことを明らかにする。本書の最後を締めくくる麻田論文はロシアが、満洲を勢力基盤とするために、一八九六年に創立し、一九三五年に満洲国に売却された中東鉄道を、いくつかの時期区分をもとに論じる。本稿では中東鉄道を通じてロシア／ソ連と満洲との間に濃密な交流があったことを明らかにしている。

以上、やや駆け足で紹介をしたが、本書に収録されている論文は、若手研究者達がこれまで発表してきた著作や論考をもとにしたものが多く収録されており、現在の満洲研究の最前線が収められているとも言えよう。

期せずしてか、はたまた編集の方針なのかは定かではないが、本書の中に通底する問題として流れている二つの点が評者には一番興味深かった。一つは、満洲を単に過去のものとして論じるのではなく、日本や現在の中国につながる問題として、表に出ていなくても「戦後」の問題が論者の中に意識されていると思われる点が、これまでの論文集にはない特徴であると感じた。もう一つは、満洲を満洲だけで見るのではなく、日本との関係も新たに捉え直した上で、その周辺、モンゴルやロシアとの関係を含めて論じている点である。これも新たにこうした問題が重要であると、若い研究者達が鋭敏に感じた結果であると考ええる。

実は、評者もかつて二〇〇七年に本協会にて戦後満洲についての講演を行ったことがある。その時は、幼少期にまさに満洲にいたという人々が多く聞きに來られており、その時の体験に根ざした質問・討議が多く飛び交い、自身の研究がまさに「現実」の歴史なのであり、そこに生きて体験した人々がいるのだなということを、改めてまざまざと感じた。本書

を読みながら、ここに多く収められた講演の会場では果たしてどのような質疑が飛び交っていたのだろうかとも思い、難しいだろうが、その点も知りたいと思った。

とは言え、以上に紹介した豊富な内容を含む本書は、満洲という地域に漠然とだが興味を持っている人にとって、現在の満洲研究の現状を伝える良質な見取り図となっていると言えよう。

(おおさわ・たけひこ 国立公文書館公文書専門官)

『郭沫若研究会報』第一五号

〈目次〉 民国抗日戦争期に於ける郭沫若の「書」及び「文学」の論理——郭沫若に於ける「言語」「文学」「思想」の表出としての「書」様式の史的变化について（松宮貴之）／郭沫若の史劇『蔡文姬』創作をめぐる（蔡震／岩佐昌暉訳）／田漢・郭沫若、谷崎潤一郎の交流と継承する未裔たちについて（齊藤孝治）／「寄稿」郭沫若「果を失った雀」によせて（上村京子、付記（香月隆）／郭沫若「失巢的瓦雀」と須田慎一訳「巢を失った雀」（編集部）／郭沫若の翻訳者・須田慎一の伝記——小笠原信之「ベン」の自由を貫いて（瀬戸宏）／一枚の興味深い名刺（郭平英、岩佐昌暉訳）／郭沫若の「将」と「杖」——『敝帚集』『遊学家書』『棠棣之花』『蔡文姬』（大高順雄）

【B5判 三六頁 日本郭沫若研究会事務局刊】

入手については日本郭沫若研究会事務局にお問い合わせください。
TEL・FAX 092-715-2554 japankakuen@gmail.com